

5) 國津神社・幸神社の祭礼に見る歴史的風致

田の國津神社と栖原の幸神社

國津神社が祀られている現在の田（旧田村）と、幸神社が祀られている栖原（旧栖原村）は、『湯浅町誌』によると、その昔、田と栖原は一体で「多須原」と呼ばれていたこともあるという。どちらもみかんの段々畑が広がる山々に囲まれ、リアス式海岸の海に臨む小規模な農漁村集落である。農業を主な生業としてきた北東部の「里」と呼ばれる地域と、漁業を主とする南西部の「浜」と呼ばれる地域に地区内の生活文化圏が大別される点も共通している。なお、田

の字出雲の集落は独立した場所に存在するが、祭礼では「里」に含まれる。また、栖原の東には「団地」と呼ばれる新興住宅地も形成されている。

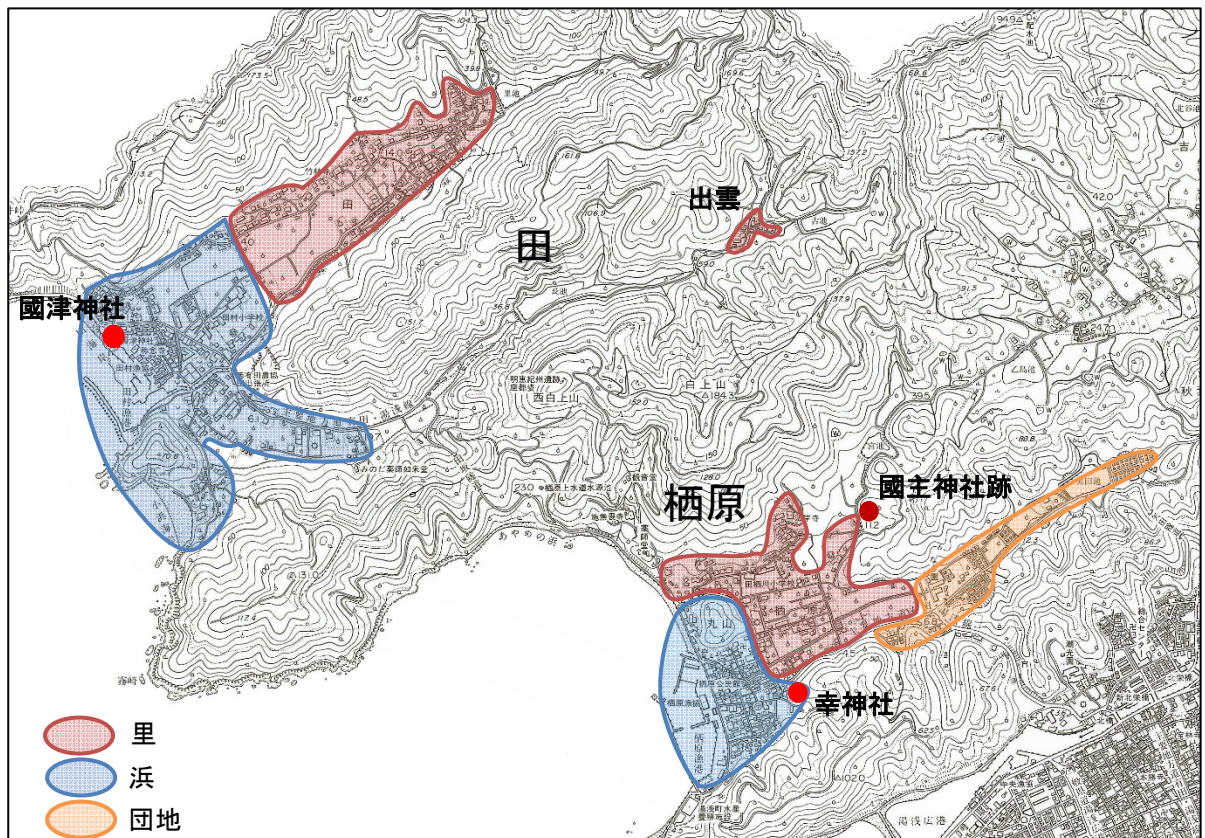
田と栖原は、市町村令が發布された明治22年(1889)から、吉川（旧吉川村）を加えた旧3村が合併して出来た田栖川村に属した。田栖川村が誕生した当初は、田の國津神社以外にも旧村社として栖原の國主神社と吉川の逆川神社が祭祀されていたが、明治40年(1907)に國主神社が、明治42年(1909)には逆川神社が、村内にある他の神社共々、國津神社に合祀された。



みかん畑と海に囲まれた集落〔栖原〕



小浜海岸〔田〕



田と栖原の「里」と「浜」の範囲図

國津神社は、社伝によれば、素盞鳴命・大己貴命・建御名方命が、田の小浜海岸の沖にある澳津島（曾加美）で魚釣りをし、その後、小浜海岸の大蛇島に移り、大己貴命（大國主命）が巖窟に鎮座し、元正天皇の御宇（715～723）にその場に祭祀されたという。後に小浜の巖窟から神物原（今は物原という）に遷祀し、文永7年（1270）9月、現在の地である宇賀の森に遷座して今日に至るという。



國津神社拝殿

天保10年（1839）刊行の『紀伊続風土記』には、当社は、もと久豆呂の宮（久豆とは國津のことで、呂はその助語）といわれ、その後國主大明神社といったが、やがて國津神社と称されたと記されている。また、湯浅にある顯國神社は、湯浅の土豪湯浅権守宗重が当社より勧請したとある。



國津神社本殿

当社は、久豆呂ヶ岡という小高い丘の上にあり、境内へ入るには丘の東側にある参道の石段を上る。丘の西側は崖になっていてその向こうに久豆呂の浜が広がる。社殿は、本殿は天保10年（1839）に再建され、拝殿と祝詞殿は明治29年（1896）に再建された後、昭和14年（1939）に大掛かりな修理がされていることが棟札などの記録から判っている。社殿の背後に控える宇賀の森は、大きな松や楠・柏・アコウなどが鬱蒼と生い茂る鎮守の森である。境内は南向きに開けて陽光が降り注ぎ、海からの潮風が吹き抜ける。主祭神は大己貴命と少名彦命で、配祭神は伊弉冉命・天照大神・奇御氣野命・速玉之男命・事解男命である。

一方、幸神社は、江戸時代に房総、蝦夷、樺太、千島の漁場を10代にわたり開拓した栖原（北村）角兵衛が、自らの所有地であった現地に祀ったものと伝えられている。幸神社は、明治10年（1877）に栖原村村社の國主神社の境内に移され、明治40年（1907）には國津神社境内神社の稲荷神社に合祀された。しかし、その直後、栖原で腸チフスが流行したこともあり、地元の希望によって國津神社から宇前山の現地に戻されて祀られている。樹木に覆われ昼尚暗い参道を登ると、山の中腹に西向きに開けた境内がある。社殿の本殿や参道の石段は、昭和11年（1936）に氏子たちによって寄進されたものである。祭神は猿田彦命で、地元では「さいのかみさん」と呼ばれて敬愛されている。



幸神社拝殿



幸神社本殿

國津神社の祭礼

國津神社の祭礼は、4月15日に春祭、7月15日に夏祭、10月15日に秋祭、12月15日に冬祭が執り行われる。最も盛大なのは秋祭で、神輿渡御行列や、太鼓を載せた山車、オニとワニが獅子を退治する三面（神楽）と呼ばれる獅子舞の奉納など、古式に則り、氏子総出で豊作・豊漁を祈願する。祭礼が始まった明確な時期はわかっていないが、祭礼に使用する幟を収めていた文政の木箱が残っていることから、少なくとも江戸時代のこの頃には、現在のような形で行われていたと考えられる。

田には、神社の総代とは別に祭礼の世話役を担う「頭屋」の制度が残っており、里と浜にそれぞれ頭屋を置く。浜では40軒、里では50数軒の名乗りを挙げた家の中から、抽選でその年の「当たり頭屋」を決めている。里と浜はそれぞれ山車一台を所有しており、祭りが近づくと、青年たちが毎晩頭屋の家に集まって、太鼓と笛の練習を行う。里と浜では、太鼓の打ち方や笛の旋律がそれぞれの形で伝承されている。里の山車は毎年その年の干支の作り物を上に載せることになっていて、太鼓や笛の練習で頭屋に集まる青年たちが、練習の合間に手作りで作っている。また、浜は、山車とは別に三面獅子舞を伝承しており、獅子舞は夜に神社の境内で練習が行われる。里と浜、それぞれの青年たちによって、山車及び三面獅子舞が代々受け継がれている。

祭り当日は、朝9時頃から、里と浜の若衆は、大小二つの太鼓を乗せた山車を押して各家々を門付で回り、太鼓と笛で囃し、祝儀をもらう。11



神輿渡御



文政の幟箱（里若連中）

時、神社の境内に宮総代と田、栖原、吉川各区の役員らが集まり祭典が始まる。本殿での祭典を終えると社務所で直会が行われ、祭典に出席した役員たちは食事をとる。13時を過ぎると、神社の参道前には保育園児らが引く練り物が到着し、またその頃には、その年の浜の頭屋前の路上で三面獅子舞が披露される。三面と里、浜の山車はそれぞれ神社へと向かい、参道前に到着した山車は、太鼓を打ちながらほかの屋台とともに待機する。14時、宮司が御神体を二基の神輿に移し、境内で三面獅子舞の奉納が始まる。この奉納を終えると、オニが獅子を先導し、ワニが後を追いつつ境内から出ていく。境内から延びる参道の石段を降りたオニ、ワニ、獅子は、参道前にて家廻りのときに踊る演技を披露する。



参道前で太鼓を打ち、笛を奏でる

三面獅子舞の奉納が終わると、渡御行列が出発する。渡御行列は、「ワッショイ、ワッショイ」の掛け声とともに、船形神輿(保育園児) → 俵神輿(小学1～3年生) → 太鼓 → 神輿(小学4～6年生) → 幡(里、浜) → 吹き散り(里、浜) →



子供神輿

山車(里、浜) → 宮司 → 巫女 → 櫛 → 御幣 → 宝刀 → 御幣(金) → 鉾 → オニ → 神輿 → ワニ → 各役員(御幣(金)・櫛持ち) → 法螺貝の順に行進していく。神輿は、順路どおりになかなか行こうとせず、脇道に逸れるのをオニが連れ戻す。この行列は途中、田村みかんの出荷組合などの広場や路上で休憩をとる。このとき、里、浜の各山車では若衆だけでなく、過去に太鼓や笛の奏者として鳴らした者もこぞって参加し、それぞれの技を見せあう。

渡御行列は、かつて大己貴命（大國主命）が國津神社に遷祀される前に祀られていたという、物原と呼ばれる場所に到着する。ここでは神輿を据え、宮司による祝詞奏上と巫女舞を奉納し、祭典を行う。これが終わると御旅所に向けて行列が動き出す。物原を出発した一行は、いよいよ小浜海岸の御旅所に到着する。神輿は到着しても何度も練りまわしや押し合いをし、なかなか御旅所に据えられない。ようやく御旅所に神輿が据えられると、直ちに祭典が執り

行われ、三面獅子舞が奉納される。演者の体力は限界を迎えているが、ここでの三面獅子舞は最後ということもあり、かつて獅子舞を演じた先輩たちからの激励の声を受けながら、力を振り絞り、非常に熱の入った演技が披露される。

獅子舞の奉納が終わると、氏子たちは小浜の砂浜に降り、堤防の上から餅撒きが行われる。餅撒きでは懸け鯛も投げられ、盛り上がりを見せる。この餅撒きが終了すると神輿は國津神社まで運ばれ、還幸が速やかに行われて祭礼は一切終了となる。

國津神社三面獅子舞

國津神社の三面獅子舞は、オニ・ワニと呼ばれる異形の者が獅子を退治するこの地方特有の芸態を有しており、特に胴幌の内に4人が入る獅子は、有田地域の有田川流域の集落に見られる獅子舞の形態である。獅子舞の形態には類似性があっても、その演技は國津神社独自のもので、静と動の動きの中でオニとワニが獅子と激しく対峙し、約25分にも及び切れ目なく連続する貴重な芸態をよく伝えている。信仰の上においても、祭礼の場を清浄に保ち、神輿の先導を務め、祭礼の進行に大きく携わる重要な役割を持っている。

現存する國津神社の三面獅子舞の記録で古いものは、明治29年(1896)調製の『寶物古文書什器臺帳』に祭典具として「獅子頭(幕添)」「假面(装束付)」と記載されているが、顯國神社と同じく少なくとも近世に遡るものと思われる。オニは鼻高面を付け、ワニは口の



物原での神事



御旅所での三面獅子舞の奉納



餅撒き



國津神社三面獅子舞

大きく裂けた面を被り、頭に緋色の鳥兜を付ける。濃い緑色の上下の装束に、緋の上着を重ね着る。右手に演者が「カンピョウ」と呼ぶサイハイ（紙垂の付いた棒）を持ち、左手で肩に鈴の付いた鉾を担う。獅子の胴幌は緋色で全体が覆われていて、頭の下の前垂れのみが白黒の横縞模様である。また、國津神社の三面獅子舞にはお多福も登場する。お多福は、白っぽい上下の装束に緋色の袴を着用し、お多福面を付ける。頭には薄黄色の被り物を被り、手には扇子を持つ。獅子の胴幌の乱れを整えたり、寝ている獅子が尻尾や耳を動かすのを諷めたりするなど、演技における補助や道化的な役割を担っている。



家廻りの様子

三面獅子舞は、祭礼前日の朝から晩までの一日中と、祭り当日の午前中に、地区内の全戸をまわる「家回り」と称する門付^{かどづけ}を行う。まず、お多福が各家の門戸をたたき、家人に声を掛けて獅子舞を行う。門付では2人立ちの獅子と、オニかワニのどちらか一方で家廻りの演技を演じる。太鼓の合図で獅子が玄関から中へ入り、オニあるいはワニによって鉾で鎮められると家から出て行く。終了するとお多福が祝儀をもらう。



境内から獅子を連れ出す

祭礼当日は、浜の頭屋の前と、神社の境内、そして小浜の御旅所で三面獅子舞を奉納する。境内拝殿前で奉納は、締太鼓の調子に合わせて、オニ、獅子、ワニの順に入場する。獅子が中央の筵に寝そべると、その周りでオニ・ワニは獅子に気付かれないように、身体を反らすようにして獅子の様子を伺う。やがて鉾を獅子の前に突き立てると、獅子は暴れだしてグロを巻いて立ち上がり、上体を大きく反らして回す。

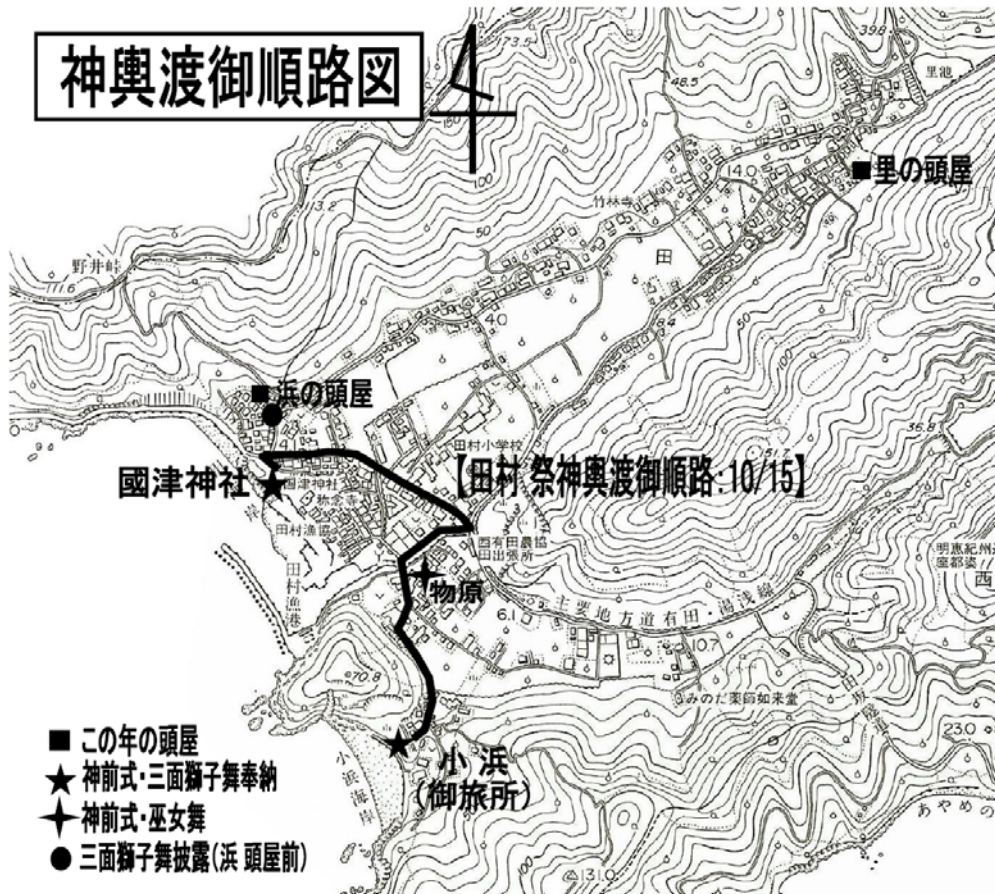
獅子が立ち上がるこの所作は「天狗の舞」と呼ばれ、獅子頭を遣う者を残りの演者たちが肩車で支える。「天狗の舞」という呼称は、ここ十数年程でそう呼ばれるようになったもので、元は肩車を指す「天車（てんぐるま）」と呼んでいたのが転訛したものである。オニとワニは体勢を戻した獅子と激しく対峙し、ついに獅子を倒し鎮める。締太鼓が打ち鳴らされ、オニは獅子を起こして境内から連れ出し、神社参道の石段を、サイハイを振り、片足で跳ぶ所作を繰り返しながら下りていく。

参道前では、引き続き家廻りの演技が披露される。このときは、オニ・ワニ両者と4人立ちの獅子で踊る。寝獅子の前に進んだオニは、頭を貫くほどの位置まで鉾先を素早く4回突き刺す。獅子は鉾先をかわしつつ、これに咬みつこうとする。オニは鉾をゆっくりと大きく後ろにまわして地面に突き立てる所作を2回繰り返し、最後は顔を近づけるようにして獅子と強く対峙する。その間獅子は、歯咬みしながらゆっくりと起き上がるが、やがて再び寝る動きをみせる。これらは境内で奉納された演技の単なる省略ではなく、まったく別の所作である。短いながらも緊張感溢れ、オニ・ワニと獅子との対決色が凝縮されている。オニが所定の位置まで戻ると締太鼓が打ち鳴らされ、ワニがサイハイを振りながら獅子の方へ跳ねてゆく。オニは獅子の頭をサイハイで打って起こし、起こされた獅子はオニ・ワニと共に退場する。舞い終わると、神輿のお渡りの開始となる。



参道前で家廻りの舞を奉納

國津神社の三面獅子舞の伝承は、現在は保存会が組織されてはいるが、実際は昔から変わらず浜の若者たちが仲間に声を掛けて演者を募り、祭礼時に奉納されている。浜の若者だけでは演者の人数が揃わない年は、里から助っ人に来てもらう事になっている。練習の際には、三面獅子舞を経験した先輩が代々演技を指導しており、國津神社の三面獅子舞は、田に住む若者たちが受け継いできた伝統によって永く守られている。



10月15日 田村祭 神輿渡御順路図 (平成27年)

幸神社の祭礼

幸神社の祭礼は、7月16日に夏祭、10月16日に秋祭が執り行われる。秋祭での神輿渡御や太鼓の演奏、三面獅子舞の奉納が行われるようになったのは、昭和27年(1952)からである。その当時の田栖川村の村社は國津神社で、栖原に祀られていた幸神社では祭礼の神事だけが執り行われていた。そこで、村の商工会の役員たちが相談し、栖原のお祭りを盛り上げようと企画したのが現在の栖原祭りの始まりである。祭礼には神輿が用意され、國津神社に伝わる三面獅子舞が採り入れられた。

いずれも主役は子どもたちである。太鼓は田の里から習い、青年団が受け持った。それから現在まで毎年、神社総代会の世話役たちが祭の準備を進め、子供や青年が中心となって祭礼が執り行われている。



神社参道上り口での三面獅子舞奉納

栖原祭りの祭典は、祭当日の正午から幸神社の境内で執り行われる。神社の下、参道の上り口付近では、青年団による太鼓が演奏されている。神前式が終わると、神輿が石段を降りて参道の上り口に据えられ、三面獅子舞が奉納される。三面獅子舞が終わると、神輿渡御が始まる。前半は神輿と担ぎ手、三面獅子舞を車に乗せて東の方角へ移動する。栖原の東側は「団地」と呼ばれ、昭和50年代から宅地造成が始まり、人家の増加に伴って渡御の順路に組み入れられてきた。山車は、神輿一行が到着する場所へ常に先回りし、太鼓をたたいて神輿が来ることを知らせる。それぞれの要所では三面獅子舞が披露され、神輿の練りまわしも行われる。

団地での獅子舞を終えた行列は再び車で神社前に戻り、そこから神輿は徒歩で田栖川小学校へとむかう。小学校に到着すると三面獅子舞が披露され、神輿の練りまわしも行われる。ここでしばらく休憩をとってから一行は行列を組んで再び来た道に戻り、江戸時代の豪商の栖原角兵衛の屋敷や、江戸で砂糖商を営み、幕末の志士であり儒者でもあった菊池海荘の屋敷跡の目前を通り、南の堀へと向かう。南の堀はかつて浜の集落内の広場にあたる場所で、ここでも三面獅子舞が披露される。

南の堀での獅子舞を終えた一行は栖原漁港内に設けられた御旅所に到着する。御旅所では先に到着していた太鼓が打ち鳴らされている。神輿が到着すると練りまわしを行い、所定の場所に据えて洗米、水、酒、二重の餅、鯛、乾物、野菜、果物などを献撰し、祭典が始まる。傍らで、青年団の仲間同士による海への落とし合いが始まると、水しぶきと歓声が上がる。祭典が行われている後方では三面獅子舞も同時に奉納される。

祭典が終了すると、漁港の荷捌所の屋上から餅が撒かれる。餅撒きでは懸け鯛も投げられ、大いに盛り上がる。餅撒きが終了すると神輿は神社へと運ばれ、神社では宮司によって御神体の本殿へと戻されて、祭礼は一切終了となる。



菊池海荘屋敷跡の前を通る神輿渡御



漁港の御旅所へ向かう神輿



餅撒きで投げられる懸け鯛



餅撒き

幸神社三面獅子舞

國津神社の三面獅子舞の所作を習い、昭和 27 年（1952）に当時の栖原の小学五年生の男子児童によって奉納されたのが最初である。その後、三面獅子舞は六年生の男子児童が演じるようになり、神輿は五年生と四年生の男子児童が担いだ。昭和 55 年（1980）には初めて六年生の女子児童も神輿を担ぎ、女子も祭りに参加するようになった。近年は少子化が進み、六年生だけで獅子舞をするのは困難になり、下級生も演者に加えている。三面は栖原の三年生以上の男子児童全員で構成し、神輿の担ぎ手は六年生から三年生までの女子児童が務めるようになり、平成 27 年（2015）からは六年生と五年生の女子も三面獅子舞を演じるようになった。

毎年 10 月初頭に三面獅子舞の練習が始まる。練習は夜に 1 時間半ほど行われる。練習期間は演技の完成度などでも変わるが、休みも入れて 10 日ほどである。子供たちが獅子舞の練習をする間、神社の総代たちによって注連縄^{しめなわ}が作られる。

祭り本番の 4～5 日前から村廻りが始まる。三面獅子舞は、祭り当日までの間に栖原地区内の家を一軒ずつ、その年に不幸事のあった家を除いて全てまわる。三面一行は、玄関先で獅子頭をパクパクと鳴らしてご祝儀をもらい、要所で村廻りの演技を披露する。村廻りは連日、放課後から開始し、日が暮れてすっかり暗くなるまで続けられる。村廻りなどで見られる光景として、國津神社と幸神社の三面獅子舞では、頭が良くなり、無病息災でいられるようにと氏子が獅子に頭を噛んでもらう風習があるが、顯國神社の三面獅子のようにオニ・ワニの鈴をいただく風習はない。

幸神社の三面獅子舞では、國津神社の三面でいうところのオニの役割を天狗、ワニの役割を鬼と呼ぶ。天狗は高い鼻の面を付け、鬼は二本の角が生えた面を付ける。緋色の上下の装束を着用し、両肩に水色のタスキを掛ける。右手に白色のサイハイを持ち、左手と肩で鈴のついた鉾を担う。獅子の頭は木製で、小学生が扱うには少々重い。胴幌の全体は緋色で中に 3 名が入る。お多福は、ほおかむりをし、お多福面を付ける。水色の上着に緋の袴を着用し、手に扇子を持つ。幸神社の三面獅子舞には、國津神社の三面には無いひょっここが登場する。ひょっここも、ほおかむりにひょっここ面を付ける。水色の上着に白の股引を着用し、手に扇子を持つ。彼らは、観客を扇子で扇いで愛嬌を振りまきつつ、獅子の乱れた胴幕を直すなど演技を助ける役割を担う。演技の始まりと終わりに打ち鳴らされる締太鼓の演者は、天狗・鬼と同じ装束で、頭に水色の鉢巻を巻いている。



幸神社三面獅子舞



注連縄作り



村廻りの様子

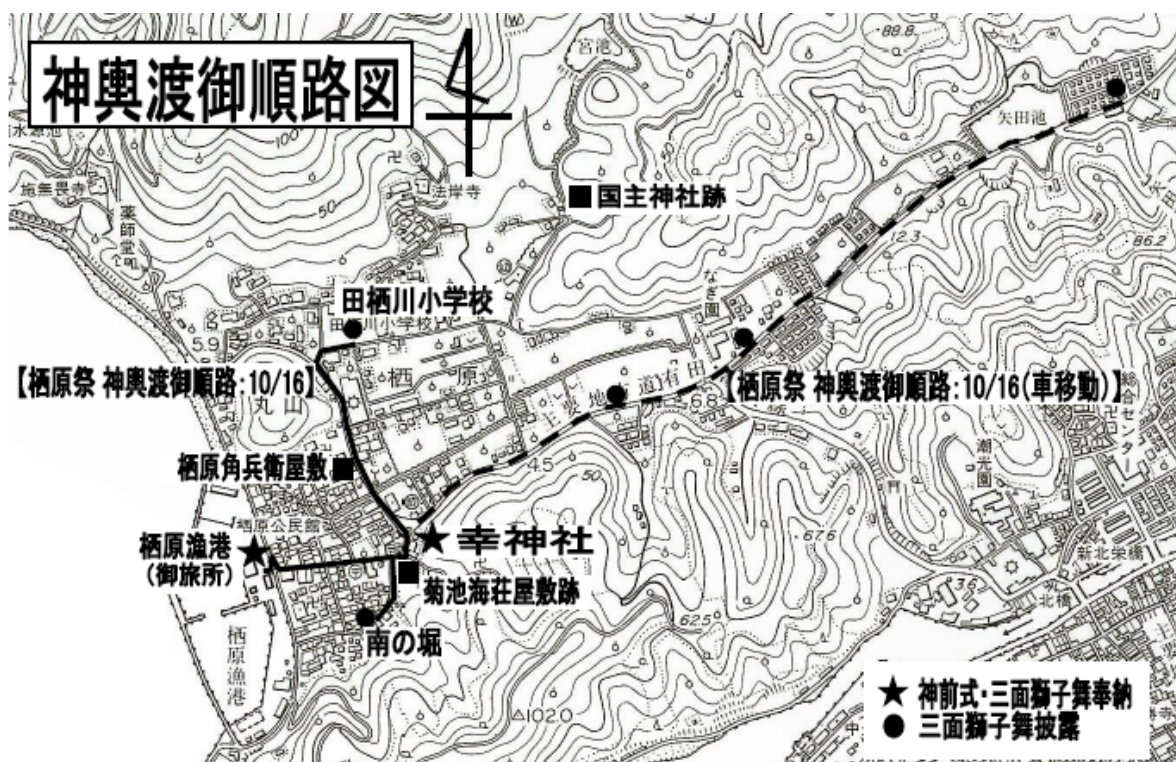


愛嬌をふりまくひょっここ

幸神社の三面獅子舞は小学生が演じているため、獅子が肩車で起き上がるところを立ち上がるだけにしたり、所作のためが短く演技のテンポが速くなったりしているが、天狗・鬼・獅子の基本的な所作は國津神社の三面獅子舞をきちんと踏襲している。神社下での最初の奉納から、神輿のお渡りとともに順次地区内を廻り、最後にお旅所である栖原漁港で大勢の氏子たちに見守られながら踊り終える。幸神社の三面獅子舞は、子供が演じるにより、栖原固有の変容を遂げつつ、地域に溶け込み、独自の愛らしい三面獅子舞として人々に愛好されている。



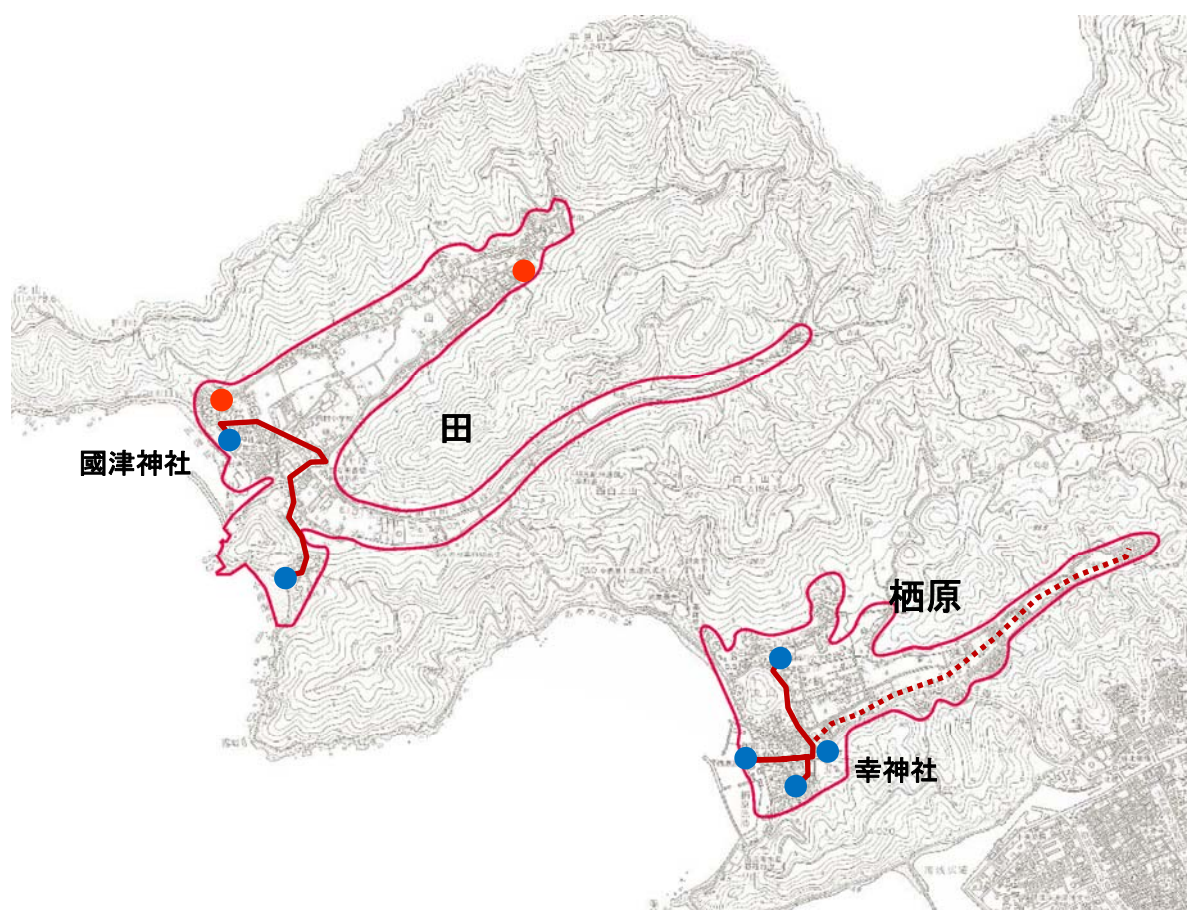
力を合わせて獅子舞を奉納



10月16日 栖原祭 神輿渡御順路図（平成27年）

田と栖原は、かつては同じ田栖川村に属し、國津神社を村社としてまとまっていた集落である。國津神社の祭礼とそこで奉納される三面の獅子舞は、小浜海岸など自然環境に恵まれた環境で古式をよく伝えており、子供からお年寄りまで地区住民総出で祭りに参加している。幸神社の祭礼と子供たちによる獅子舞も地域に定着し、栖原角兵衛屋敷や菊池海荘屋敷跡など歴史的な建造物が残る環境で執り行われている。

豊かな自然を身近に感じながら暮らしてきた集落の人々にとって、神社は信仰の対象であり、祭礼を通じ、地域への愛着心の拠り所でもある。神社もまた氏子を思いやり、いずれの祭礼でも、獅子舞が集落内の全戸へ神徳を与えに回る。國津神社と幸神社の祭礼には、沿岸部の集落における人々の暮らしと信仰が反映された歴史的風致が集落全体に受け継がれている。



凡例	神社、御旅所、主な三面獅子舞奉納場所	●
	平成27年(2015)の頭屋	●
	平成27年(2015)の神輿渡御順路	—

國津神社・幸神社の祭礼に見る歴史的風致の範囲